

# 友林蘇岐

(一)



## 寄附金募集廣告

今般江畑校長岐阜縣へ御榮轉被成候に就ては先生多年の勳勞に酬ゆる爲紀念品を贈呈し聊が報恩の微意を表し度候間何卒右御趣旨御賛同被成下應分の御寄附に預り度乍畧儀以誌上得貴意候頓首

追テ紀念品ハ乍專斷金時計及附屬品ト決定致候間左様御了承被下度送金ハ學校内征矢野茂樹宛ニ願上候尙振替ハ一時中止ニ候間是亦御承知被下度候  
五月二十二日

## 木曾山林學校 校友會 卒業生各位

## 學術

### 水力に就て 其一

林業家は水力につき注意すべき必要なしが天然に且つ無限にエネルギーを吾人に提供

明治四十五年四月二十三日印刷  
明治四十五年四月二十五日發行  
編纂發行人 長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地 安井正夫  
印刷者 長野縣松本市本町百八拾四番地 兎澤忠雄  
全縣全市 交文社 番地  
印刷所 交文社 番地  
發行所 長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地 蘆澤書店

○岐蘇林友 目次  
○學術 水力に就て 加賀能登の海岸砂防林  
○文苑 所感、欲しさの、失敗、余の植林事業、過去一場の夢、狂夫漫言、花を惜む、長閑、行春、緑、初夏、離別、郷里、俳句  
○雜報 學校近況 寄宿舍便り 卒業生便り 會費領取報告

しつゝある水力を放置して無價値のものとなすか之れを水車に作用せしめ鋸工場を設け製材の動力となすべく或は木樋を裝置し管流の用に供すべし而して山間の溪谷には主人公たる者は常に多量に存在し早魃洪水の患少く更に地形上水頭の高きを求むること容易なるに於て尙且水力の應用に注目せざるは驚くの外なしとす、況んや林業の進歩發達は唯單に木材の生産のみを以て満足せず必ず之れに加工して用材となし器具となし直接需用者の欲望に投すべきなり彼の獨乙國は木材生産國として世界第一位にあるに不拘又木材輸入國として第二位を占むるものは畢竟木材工藝の進歩により粗材のみならず輸出せず加工して輸出するの結果に外ならざるべし、我國未だ此域に達せずと雖も森林收益を増加する点に於て一日も忽にすべからざることを而して簡單に軒材板材を製するに於ても動力は最初の必要物なるべし之れを水力に求むるは何物よりも易々たるは言を俟ざるべく見よ天龍川沿岸の鋸工場を皆小規模の裝置にして至る所にありて天龍杉を盡く製材して或は軒に或は板に或は板割となして京濱の市場に輸出す此等工場の規模は小にして僅々一二の丸鋸を使用せるものにして少量の水力を利用して普通の水車を回轉するに止まり余嘗て天龍沿岸の林業を視察し廣大なる杉の人工林には驚かざりしも製材工場の数と天然力の利用に注目せる点に於て吉野川沿岸の之等の劣れるを感じぬ、此に於て水力に就て簡單に記して會員諸兄の參考に供せんとす

其一 水源地  
水力を求むべき水源地は如何なる資格を有すべきかを考ふるに水を取らんとする谷を水源地と云ふ谷の奥は如何分岐すとも必ずあり故に最小量を目安として設計を立つるときは常に甚しき多量の水を放棄するの結果を來すを以て夏期溜水の際に動力を中止するも差支なき場合には一層多量の分水を行ふことを得べし即ち分水上注意すべきは夏期に於ける灌漑用水旱魃の爲減水すること及び冬期結氷の爲め流水の少きことを等とす而して分水量を定むるには一年間の最少水量を標準となすを要せず年中の最少量より更に多く分水するを可とす

其二 谷川の水量測定  
測量術によれば川の水量を測定する方法は種々あれど簡易にして誰れにも行はれ得る

方式を上げんとす勿論極めて精密の結果は望み難きも實用上差支なき簡便法なり

1. 川の横断面測定 谷川の横断面を知る爲めに川を横ざりて糸を張り可成タルマの様に所々に竹竿を立て糸を緊張す三尺乃至六尺毎に(或は一尺毎に)符を付けおき此符に沿ひて他の川と境せしめ其所の川の深さを山にして他の川と境せしめ其所の川の深さを云ふ一つの谷は一つの分水嶺によりて圍まれたるものなれば降雨なれば分水嶺内に落ちたるものは皆此谷に流出すべし故に分水嶺の廣狭によりて水量に多少を來す而して一分水嶺内に降雨あれば低きに從て水は谷川に流出すれども土壤は水を吸収し滲透し樹葉は蒸發を助くるものなれば總雨量より吸収滲透蒸發の量を減じたる殘部が谷に流れ出づる水量となるべし土壤に吸収されし水は漸次流出するものなれば吸取量多き水源は最も望ましきものとす森林が最も此等の作用に富むものにして早魃の時期にも甚しき涸渴を來さざるなり、此の如く森林地にありては乾涸の患なきを以て水源地には申分なき適地となす水力を利用するに於て乾涸が最も恐るる所なれば最大涸水標準として方針を立つるを普通とせり最大涸水と最大量との間には實に甚き差異ありて最大量が最小量の百五十倍に達するこゝと測り知るべし川幅と此等の深さとによりて横断面を作り其面積平方尺なるかを知らべし即ち深さの平均數に川幅を乗すれば可なり深さを測る竿の長さを讀むときは水下にて竿を見るべし水上にては水は竿に當りて高く表はるればなり

2. 流水の速度を知る かくにして谷川の横断面積を知りたるときは一秒時に幾尺の速度にて流れつゝあるかを知らるるを要す

此れを知り簡易なる方法は直径一寸位の竹の下部の一節を残して他は節を抜きたる長さ一尺乃至二尺のもの數本作り砂利を入れぬ深淺に從て長短を撰び何れも水底より一、二寸離れて流るる長さの竹とす此竹を十間乃至三十間の區間を幾秒にて流るるかを見ればよくかくすれば一秒時に幾尺流るかを知ることも容易なり水の速度を測定する個所は最初横断面を取りたる所なるを要すれば横断面を取るときに速度の測量し易き平均に流れつゝある個所を撰ぶ可とす即ち川の幅の中庸なる流れの普通なる所とす川の流速は兩岸に緩く中央に速かに且つ水面は速かに水底は緩きものなれば横断面の區間毎に其流速を測り平均するを最も可とす此の如くにして速度を知り横断面を知るときは相乗して水量を知る

$Q = AV$

Qは水量にしてAは横断面(平方呎) Vは流水平均速度(一秒時つゝ何呎)

小流には堰流法にて川を横りて堰を造り流水を遮り堰の一部に凹所を作り其上を流過する水の深さと凹所の水とを知りて水量を知る方あり堰は垂直にして川に直角をなし凹所は必ず川上に尖端を向けたき尖端は三角形に削りたくものとす堰毎一呎の上を流るる各深さに於ての毎分立方呎の水量ありて此表を用ひて凹所の幅と凹所の上を流るる各深さとを知るときは水量を求め得るなり (未完)

加賀及能登の海岸砂防林

一 加能二州即ち石川縣に於ける海岸の飛砂地は全面積凡三千百町歩で内既に黒松林として防潮及砂防の目的を達しつゝあるものが凡八百八十町歩残り面積二千二百二十町歩即ち全海岸砂地の六割八分は無立木地である

斯の如く二千町歩に餘る國土の一部を空し荒廢に委すと云ふことは國家經濟上將た國土保安ト遺憾の事であるから本縣は今四十五年以降十年を期して之れが植栽を奨励することに至つたのである

二、是等無立木砂地に對して植樹を行ふに於て生ずる處の利益は凡左の如くである

(イ) 飛砂を防止して耕地及宅地の埋没を防ぐこと

砂地は強風の都度内部の耕地に砂を飛ばし或は内部耕地に近く砂丘を形造り其砂丘は漸次移動して耕地を埋むるに至ることが少なくないのである、江沼郡福田村、石川郡大野町、河北郡内灘村、及羽咋郡東増穂村の如きは其著しきもので大野町の如きは風上金石町の松林を伐採した結果砂丘のために人家を埋没せられた様な慘狀を蒙り數十尺の砂丘にして龜齡町、幸町等の町名を存し居るのである、龜齡、幸等の文字の斯かる不吉の土地に冠せる事と思はざるに忍び得ざる慘狀と云はざるを得ないのである

然かも是等の慘害は黒松林の成立に依つて防ぎ得ることは明かなる事實で羽咋郡の海岸の如き多くは是れが保護に依つて住民皆に其堵に安んじて居る情況である

(ロ) 潮風を防ぎ作物の收穫を増加す

海岸の森林が内部の作物に對する潮風の害を防ぐことは、内外學者の夙に實驗唱導する所で殊に黒松は潮風に對して抵抗力強く能く防風の用をなすものである、石山郡御手洗村宇徳光の如き耕地整理に

際して海岸の松林を伐採したため潮風の害を受け收穫著しく減じ困難しつゝあるのである、又河北郡七塚村で有名なる木津桃の産地は一時海岸の松林を伐採したため其の收穫を減じたるに覺醒して松林の増殖を圖つた結果現今漸く其收穫を恢復しつゝあるもの、如き松林が如何に防風の功大なるかを証明して居るものと謂はなければならぬのである

(一) 魚附林として効果あり

海中の魚族が海岸の綠蔭に集る事は争ふべからざる事實で縣下全般に亘り松林を伐採したため漁獲を減じ又は松林を増殖して漁獲を増したる例は決して少くはないのである即ち金石町附近の漁獲を減じたのは前者の一例で珠洲郡西海村に於て漁獲を増したのには後者に屬する一例である即ち魚族は樹蔭を海中に投する如き森林たらずとも水中より望み得る海岸の森林を慕ひて集合するので砂防植栽によつて好く其目的を達することが出來得るのである

(二) 河口の水排きを良好にする

凡て沿海砂地を通過して海に注ぐ河川は波に打寄せられたる砂のため河口を迂回せられ同時に飛砂のため河口を淺められて水排きを不良に導くのが多いのである、縣下梯川の如き毎年水の氾濫するのは其一因が河閉塞にあるは明かに認むることを得るのである是等は海中に砂粒の存して居る間即ち水源地の山岳より十一砂を海中に流出せざるに至る迄は免るべからざる事であるけれども飛砂を防止するに於ては又以て幾分の被害を減じ得るのである

(ホ) 衛生上に効あり

潮風は或程度迄は人体に有効なるべきも飛砂は衛生上有害のものなるべく彼の「トラホーム」患者の海岸に於て比較的多數なるは之に起因する所亦不尠のである、其他不毛砂地附近飲料水の不淨なるもの多く是等は砂防植栽によりて救済し得らるべきものなるを信するものである

(ハ) 耕地を増すこと得

飛砂防止林に於て其樹木の生長にて飛砂を止め地盤を強固ならしむるに至らば土性改まり水の湧出を促し松林を飛砂の危害を起さざる程度に於て田畑を開拓し耕地を増加することを得べきものである、石川郡安原村の如き松林の間畑地十數町歩に開拓し桑、西瓜、豆類、麥等の栽培をなすつゝあるのである

(ニ) 地方住民に職業を興ふ

海岸砂防事業施行の場合には勞役を要すること多く隨て之に依りて地方住民に職業を興ふること決して鮮少にあらざらざると思ふのである

(チ) 其他無形の効果亦尠からず

航海目標となる便あること  
 氣候を調和すること  
 土地を改良すること  
 風景を添ふること  
 等砂防林に依りて収め得る効果亦尠からざるのである

リ、擇伐に依りて得る主産物収入及松脂、松根油松露等の副産物収入を擧げ得るを主目的とするものなるも黒松林成立の曉には林相を亂さざる程度に於て擇伐をなし収入を得るのみならず松脂、松根油の採收をなし得る如き將來化學工業の進歩發達につれ頗る有望の事に屬するのである

ある彼の有名なる佛國ゴールドの砂地は海岸松の砂防植栽をなしたるものなり毎年得る収入の巨額に達するものあるを聞くのである

其他松露の收穫の如きも侮るべからざるもので現今縣下松林より得る収入毎年千數百圓に達するのである

三、施業の方法

飛砂の度の強弱により砂地を三種に區別す、即ち第一種地は飛砂最も甚しいもの、第二種地は飛砂稍甚しきもの、第三種地は飛砂比較的少なきものとするのである此度に応じて保護工事及植栽等施業の方法を異にするので其の施業の概要は左の如くである

第一年目には實垣

第一種地は一町歩に付き三百間  
 第二種地は全 百五十間を新設す  
 第三種地は全 百間

第二年目實垣を修繕して其風下三四列にあかし又はねむ

第一種地一町歩千八百本  
 第二種地全 六百本を新植し保護  
 第三種地全 三百本

第三年目實垣の修繕のみをなす

第四年目は黒松苗を保護樹の風下に

第一種地全 五千五百本を植栽す  
 第二種地全 三千六百六十四本  
 第三種地全

第五年目には黒松を補植するのである、即ち一個所の造林を終了するには五ヶ年を要するのである本縣は斯如き施業計劃に基づき縣下の公有(大字有地を除く)社寺有及私有に屬する海岸砂地の飛砂潮風を防止するに必要なる植栽並に之に關する工事を施行するものに對して莫大なる

補助金を交付するの途を啓き極力獎勵區劃しつゝあるのである

文苑

○所感 西野入徳

前途有爲なる青年が小成に安んずるを見る程いぢらしい且痛ましい事は又さな

併し其苦痛、不安、不如意、不滿ころは却て吾々をして強くする思慮の母である

吾々をして奮起せしめん爲めに不如意の鞭を見舞ふのだ、天の將に吾々に大任を降

決して彼等の念頭を去らなかつた、をして此一念は遂に強き忍耐と挑まぬ努力とを

決して彼等の念頭を去らなかつた、をして此一念は遂に強き忍耐と挑まぬ努力とを

おれ彼等が其財力も其知識も其球場も、ゲームの数を増やして其財力も其知識も其球場も

一腕を揮へば天馬空に駈り猛虎風に嘯く弘法の靈筆も時に誤なきを保し難し

富に非ず、權力に非ず、名譽に非ず、力な方立ち吾惟一人此方に立つも泰然自若

○失敗

關海波

一腕を揮へば天馬空に駈り猛虎風に嘯く弘法の靈筆も時に誤なきを保し難し

敗に陥らざるを得んや、雖然進取心の物々たる彼等は其の精神を失

敗に陥らざるを得んや、雖然進取心の物々たる彼等は其の精神を失

らを殺して萬事休せりと叫ぶ可乎、冀くは薄志弱行の徒にして此醜態を演せしめて耻の上塗をなさしめよ、唯有爲なる士よ、いざ共に興に快復の策を講じて失敗に替ふるに成功を以てせんか、かの、デモスゼネスは一度演じて聴衆の嘲笑を博したり、然れども彼の英氣尙屈する能はず、日々怒濤吼へ疾風怒る海濱に立ちて辯を練り明鏡の鏡白刃の下に立ちて其の姿勢を矯め切瑛琢磨に餘念なかりければ遂に雷電の辯口角火を飛ばし舌端風を生じ滔々たる快辯を弄して滿天下を聳動し野心王のヒリッブの心肝を寒からしめ、フキリビックスとして萬世に傳へらるゝに至りしに非らずや

夫れ失敗は吾人の好試験者なり、而して其は前途に要して吾人を待てり、吾人之れに屈して可ならんや、吾人は是と戦はざるべからず、奮戦勇闘之れに勝たざるべからず、かのデモスゼネスは常に失敗に失敗を重ねたりしも益々屈せず終に光榮と平和とを双手に携へて倫敦千萬人の中に歸り威嚴堂々たるを得たり、古來成功の頂に上るものは必ず此失敗の門を経其の内敵と戦はざるべからず、若し之れに勝つ事を得ずんば、デモスゼネスも亦一庸人たりしのみ

我れ聞く純金は熱火に投ずること屢々にして其質愈純なるを、失敗は苦痛なり然り苦痛なるべしと雖も此苦痛に勝ちてこそ始めて成功の途に達し得べし、成功せる人の歴史、傑士偉人の傳記は吾人に之を證明せり彼等は失敗を良友となし良師となし侮まず撓まず折れず屈せず遂に之れを變じて我が成功となし我が名譽に歸せしめたるなり、嗚呼失敗は豈恐るべく忌むべきものならんや、吾人は信ず、有爲の青年は必ず此の賜に向つて感謝すべきなりと

私の植林事業

私が初めて植林をした日誌の一節で實に詰らんものであるが多少なりとも校友諸兄の御参考までに御紹介する次第である先づ苗木の買入から筆を起して植栽を以て終りとす考である

愈々學年休暇が近寄つたので今度の休暇を利用して、一つ先生から教はつた通り自分で植林して學理を實地に應用して見ようとは小さい胸に試験前から浮んで居つた、それから後試験中床場へ行つた時恰度北村先生にあひましたこれ幸と先生から植林上の必要な事項を種々聞いた事柄や又學校で實習にやつた事等を斟酌して植林した大畧を左に記そう

歸省したのが本年の三月二十七日であつた直ちに父上に此の趣を話して許を得、そこで自分は苗木買入の爲め旅装を整へ握飯を腰にぶらさげて家を飛び出して行く先は上伊那農學校である、農學校に行つて校長先生に面會して苗木買入を依頼しようと思つた所が學校が休暇故校長先生どころか他の先生一人も居らず事務室に事務員が三人居つたのみ早速苗木買入の話を持ち掛けた所が最早買入の時期が過ぎたので苗木は一本もなしに賣れたと言ひ切られた、仕方がないから失望して校を出たが然し此のまゝで家に歸るも残念故家に歸らずして其足で宮田村へ行つた、此村には後藤徳太郎春日豊太郎兩氏の私設苗圃があるのので先づ自分氏は明日サハラ苗木八萬本程を送り出すと云ふので大へん荷作をして居た先づ後藤氏へ直接賣拂の談判を持ち掛た所早速承知し

て、くれた先づ全氏苗圃の苗木の種類をあげると、ヒノキ、サワラ、スギを初めとしてケヤキ、クリ、トチ、ナラ等の種類があつた、之等の價格を問ふと大栗の一尺七寸以上の苗木で千本七圓又扁柏は一尺以上の苗木で四圓サハラ全しく杉は四圓五拾錢ケヤキは五圓であつた價の高いのにも驚いたが然し苗の良好なのは一層驚いた、そこで自分はなる程物が良好なれば價が高いわらと思ふた其内でも殊に良苗と思ふたのはヒノキであつた、こんな苗木は木曾あたりでは見たことも見られない

同氏の苗圃には落葉松の山出し苗は一本もない唯一年生の苗が澤山あつた、まさか一年生の苗木を山へ植る事も出来ないと思ふたから直ちに春日氏の苗圃へ行つて見たが是亦悲しい哉全氏の苗圃にも山行きに適當した落葉松は一本も見えぬ全氏の言ふには今年是非常に落葉松苗が缺乏して居つて上等苗で五圓以上で中等苗で三四圓する云ふ事を聞いて驚いた、落葉松苗が五圓以上すと話しても誰も實際に聞てくれる人はない偽の様な話のほんどである

借て今度自分が造林する木は落葉松を主林木とするつもりであつたが變行して、陰地へはヒノキを比較的日光の當る所へはサハラを植へ谷間へはスギを植へる事にした、そこでヒノキを五千本サハラを五千本スギ苗を三千本他に栗苗二千五百本を買入の約束をしてすぐ家に歸り翌日早朝父上と同行して三里の道を樂々に宮田村の後藤氏の苗圃へ着いた全氏は黒のはつち黒のもよひき十八世紀頃に流行したような煩けた夏帽子を如何にも大切らしくかぶつて大勢の雇人と一緒に黒くなつて働いて居つたが吾々を見るといと丁寧な待遇をしてくれた

ろこで前日の話の通りにて苗木を撰ぶ事にしたので自分は監督となつて選んで選んで選び出したが大抵の苗木は一尺以上のものばかりで一尺以下のものは少なかつた而し悲しい事には選び出された苗木は根部に傷の付いて居るものが多くあつた、それは察するに雇人の苗木を掘り取る時に亂暴に取扱つたからと思つた

自分は上等苗一萬五千五百本を買ひ取り八百本包を一束として十九個の梱に荷作り一束毎に多くの水苔を入れて運送に及んだ送り出したのはよいが伊那は御承知の如く交通不便の處だから二里半の道を送るにも一束に付いて五錢ずつ都合十九束で九拾五錢運賃に斯の如く多くの金を取られる故伊那人は堪つたもんでわなない、伊那町より自分の家迄は一里程あるが其間には自分の家の馬を全部運搬してしまつた(未完)

過去唯一場の夢

ベヤ一菩薩

今少し學校で勉強して見やうといふより外に何の考もない自分は、恰も水の低きに流れるが如く三年前當校の門をくゞつた初めの程は、何の理想も、何の目的もなく、後から来た人に乗越さるゝ様な氣がして唯機械的に學校に通つてゐた、吾れながら自分の意志を深く疑つてゐた、インクの臭まだ消ない新しい教科書を持つて理もなく喜んでゐる他の生徒に比して、自分は教科書を持つたまま、深い思ひに沈んだ事は幾度であつたかわからない、勉強する氣もなげれば實習に行つて働氣もない、唯五里霧中の間に第一學期試験は來て、その結果の不良なものには吾ながら驚いた

第二學期から眞面目に勉強しやうと、夏休

みを過して九月から學校へは出たが、やはり以前の如く勉強が出来ない、自分はなせこんな學校へ入つたのだらう、林業なるものが何程必要だらう、木を植ゑるに理窟も何も要するものかなどと思ふては讀みかけた教科書を隅の方へ投やつて歸々として徒らに日を經過してゐた、かゝる間にも、夕方の月の光の次第に濃くなるが如く、多少林業なるものゝ意味も分り、その必要も覺りだん、と趣味を増して勉強する氣にもなつて、初めて林業界に身を投じた幸を知り、暗夜に燈火得た心地して益々勉強した、勉強すればする程、益々林業の面白味を増し、丁度、乾いた砂が水を吸ひ取る様に、毎日毎先生先生の講義と、教科書によりて、自分の頭新しい知識を吸ひ取つた

先生から度々聞いてゐた、吉野の林業状態を實見してからは、益々林業の有利であるといふ念を増して、遇ふ人毎に植林を進め又吉野地方に旅行して吉野の林業状態を見ん事を進めた、區有林賣却の際は一時期全部賣却の件につき、總會の場所にて吾等林業狂坊三人は之れに反抗、少なからぬ題目を頂戴した、『愛林思想普及策』などと題し拙論を書いて新聞社へ送つた事もあつた

目測練習といつて日曜毎に山を飛び廻つた事もあつた、又苗圃晩霜の害豫防法なんて三尺の棒を持つて天を突く様な事を書いたノートが先頃本箱の隅から出て來た我が林業熱も思へば、あゝ、茫乎としてたは是れ一場の夢

花を惜しむ

杜

今この學生父母の喘を喫り盡して而して學末

だならず親戚知己朋友の喘を喫り盡して而して業尙遂げず蹉躓墮落自暴自棄罪を社會に歸して敢て己を責めず更に社會の喘を喫りて醜骸を維持せんとす彼等の意志の弱き事一に何々彼等の齒の強きに似ざるの甚だしきや

財あるものは財により名あるものは名を恃む此の如くして人間腐れ社會敗る依頼と満足蓋し之れ人間の敵なり社會の敵なり而して學生を墮落せしむるに特效ある妙藥なり

今の學生其の望む所は官吏にあらずんば教員辯護士ならずんば會社員要は勞することなくして美衣と美食とにあかむとするなり之を以て落第又落第三十四にして尙自ら立つことあたはず尙自ら養ふこと能はず笑ふべき哉

狂夫漫言

狂夫生

雨脚よく花を開かしめ又よく花を破る、嗚呼是何の意ぞ、我一日夢覺むれば軒を傳はり落つる滴の音点々として窓を叩きて起床喇叭の如く起床鈴の如し

乃ら起ちて檐端に出づれば新柳風に梳りて落紅地に点せり、あゝ惜しき哉

花七日とは古來の通言あり、僅かに七日の期蟬蛸の一期朝露の命……一夜風雨に犯され今朝忽ち斯に至るとは心あるもの誰か之れを痛まざらんや無情なるかな雨脚よ

軒端に茂る葎の花憂に心を忍ぶ草の愁を風に吹き分けられて哀れ空しく露を置くれ

のこと我は帳然として簷端に佇みつ

既にして我悟るところあり則ち花に告げて曰く『汝今朝散落すと雖も既に錦繡を着て

人に賞せらる而して猶餘芳を地に止む又將  
た何をか憾まんやあゝ我末だ錦繡を着る事  
を得ずあゝ豈汝に恥ぢざらんや  
と乃ち座に還りて机案に對すれば警鈴頻に  
自習を報す

○長閑

「サア一行つて動くべいか」田吾は銀を肩  
に起つた、そして花咲き亂れて鶯驅ふ櫻林  
を抜けた「……花がナア蝶々カア……」  
……陽炎立ち昇る麥畑の手前に来た時、田  
吾は歌ひ出した、み空は碧瑠璃に澄んで  
美しい雲がゆらいて居る、麗しい大陽に田  
吾の歌がキラリと光つた、ゆるやかな春  
風に新柳の糸が揺られて、遠い山々は紅霞  
にけぶつて居る、長閑な、うららかな、春  
の日だ

○逝く春

春雨が音もなくしどくしどくふる夕  
獨り淋しく窓によつて庭を見て居ると  
庭の櫻が、三片二片ひら散つて濼へ落つる  
のか何かさやくやうな氣がする  
かうじつと見て居ると春は永久に逝くので  
はないかと淋しい思が胸を衝いて湧く  
折から鐘がゴーン、と餘韻長く花間を縫  
て開える、又も櫻が三ひら四ひら

○緑

雨は止んだ、倉の白壁はキラ／＼と殊更白  
い、燃ゆる様な新緑をもち来る風は心地よ  
く身を襲ひ、山吹の花はこぼれる様に咲き  
亂れて、鳥は活き／＼と飛ぶ  
あゝ雨に洗はれた世の美しさ……

○初夏

霏々として花が散つた、ぞして楽しい春は  
去つて、新緑に風薫る初夏は来た——柳の  
糸に、紺碧の空に、巍々たる峰に、屏たる  
溪流に、翠の森に、青葉の林に、萌ゆる草  
に、青年の胸に——萬象に初夏のカラーは  
降り注いだ、流れこんだ、春、人生の春は  
逝つて、今や吾等は炎暑の關門に立つたの  
だ、狂瀾怒濤逆捲く大海原は渺々として眼  
前に横つたのだ、吾等は方に奮起せねば  
ならぬ活躍せねばならぬ

○離別

其れでは御達者で「御身を御大切に」  
ママで居ろよ」とと皆口々に兄上を見送つ  
た兄上は二句餘の休暇を了つて又海の人と  
なるのである  
白髮神社に身の幸福を祈つて町に着いたの  
が九時頃、町はづれにて二三の見送りの人  
と別れて兄上と二人して行く、いくら行つ  
ても同じだから歸れど兄上は言はれた  
されどすぐ歸る氣にはなれなかつた  
村はづれ迄行つて兄上の行方を見送つた  
向ふの岩は吾が慕しい兄上をかくした  
骨肉の情！知らず足は前にはこぼれた  
川の音のみ高き岩道の曲かどに二度姿を没  
した、知らず思はず足は前にひかれた  
噫！三度目には道に姿を見ることが出来な  
かつた、アノ外套の短き、ア、アノ姿を  
離別はいつも悲しいものである  
永久の別れは如何ばかりならんを泣く人の

○郷里

人の理想に生活する道は多面にして又多様  
なるべし而して此の理想以外に大に吾人に  
感化を與へつゝあるものは郷里の觀念即ち  
是なり錦を衣て郷に歸らんとは青年前途の  
感興にあらずや孤客旅愁に寒月を望み枕頭  
過雁の幽鳴に接する時萬感先づ結ぶものは  
何なるか即ち郷里なり遊學幾年温き父母の  
懷を辭し學舎に入り刻苦勉勵漸くにして夏  
季の休業を得故山に歸る時青山白水は如何  
に光をたどて彼に慰籍を與ふるか、嗚呼  
實に郷里の感化は何ぞ夫れ廣大無限なる千  
古の英雄も故山に骨を埋めんことを期し田  
夫野老も祖先の墓場に永く眠るを光榮とす  
るにあらずや、誰か郷里の觀念を去つて我  
ありと云ふはんや人々半生は多くは郷里に  
關聯せるなり愛郷の念やがては愛國の衷情  
なるを知らざるべかず入學後の所感を誌す

○和歌

江畑校長がこたび岐阜縣技師に轉任せ  
られし御別に  
安井 正 夫  
うゑたきしひのきさはらのゆくすのさか  
るはきみがたまものせん  
きみとくみきみどかたりてながらがはうぶ  
ねさすびをいまよりがまつ  
全 上 竹 軒  
ながれゆく本會の河波ひとすぢに君がわか  
れをしむけふかな

ききがゆく里のわたりはしらねどもこの河  
下をみつゝしぬばむ

○俳句集

土屋紫虹生  
春の海かもめをりだつ佐渡が嶋  
女旅寝て聞く京の春の雨  
若草の泉に霞む木魚堂  
春の雨裾野に青き細けむり  
春の風松前へ行く帆の静  
鶯や畑の中のはねつるべ  
馬洗へば嘶く癖や草かすむ  
陽炎や草に仆たれし道しるべ  
鶯やかすみぬれて初音する  
はりもの赤き木綿に桃や散る  
春の雨世をすてて祈る佛の人  
春の風やせ細く音や石光る  
木曾の春路の匂や水清し  
春の風馬と少年意氣や健  
長き日や煙草ゆらゆら小田の中  
鬼雲たり女雲たり春の空

○學校近況

●實習便り 櫻上花よ、世の人々の春に辭  
へる時に我等も毎日實習にて春日にやけ眞  
黒くなつて働き居り申候時に多少苦痛を覺  
ゆることなきにしもあらざれども之より受  
くる報酬として元氣と食安眠健康状態にあ  
るを見ては勞働は神聖なりと眞實に感する  
ものなる林業に於てをやと存候  
爲めなる林業に於ては本年度の實習を大  
理屈はこの位にして次に本年度の實習を大

畧甲上ぐべく候本年は組分を各級別に作り  
一年二年三年と分業的に作業いたし候うれ  
が爲め一局部に就きては事業の行程遅々た  
る如きも全体より見るときは反對に進行いた  
し候又實習日誌を置きて其日の事業を書  
き誌すことと相成り候而して本年度の造林  
地は昨年より一つ手前の谷の上部にして六  
日より刈拂ひに着手いたし候縦の大木等爆  
々たる音響ともにも伐り倒し壯快を叫び申  
候渴したる喉を殘雪にて醫するは山にあら  
されば得べからざる珍珠に有之候十日より  
まくりごりごりかゝり十一日には其勇壯なる  
實景を撮影いたし候十二三日は山と苗  
圃とへ三年と二年と交代にて作業いたし候  
爾後たいてい此順序にて候ひき

十五日には新入生五十餘名を迎へて賑やか  
に相成り候十七日より扁柏の植付けにござ  
り申候地味は良好なるも晴天打撃き土  
地乾燥の爲如何と心配いたし候ひしが十九  
日にはたあつらへ通り雨天にて定めし木も  
息吹き返せし事と存候二十七日には造林事  
業終了し全部苗圃へ着手仕り候一年生は例  
の如く尻はし折りにて運搬や床替に従事い  
たし候

苗圃は總て新校舎附近に移轉し模範的苗圃  
混交床替苗圃折衷床替苗圃普通床替普通播  
種苗圃等其設備の次第に整頓し來りたるは  
喜ぶべきことに候三年生は多く模範的混交  
床替折衷床替を担當し播種苗圃は多く二年  
生担任いたし候尙此間防風林を造る爲め  
落葉松を植付け申候二十八日には二年生担  
當の苗圃は終りて五月一日より三年生の苗  
圃の砂防工事に着手仕り候かくて六日  
にて總ての事業一段落と告げ七日には春季  
大清潔法會勞休みを行ひて茲に目出度春  
季實習は終了仕り候

●校友會例會 去る四月十九日午後零時四  
十分より本年度第一回校友會例會を開きた  
り研究部長の開辭に次いで多數の辯士現れ  
或は論議に或は歴史談に喝采を博したり時  
方に花は爛漫の候にして茲に復辯舌の花を  
見たるは嬉しども嬉し

今演題と辯士とを掲ぐれば左の如し  
△生活 △信用 △村上義輝  
△農村脱走 △共同一致 △東原 智君  
△日本人の矮小なる理由 △久保照人君  
△難感 △田中 泰吉君  
△坐る國民 △今井 眞二君  
△戸隠登山 △小崎 次郎君  
△談論を盛んにすべし △細江七兵衛君  
△生臭坊主 △鳴澤 義雄君  
△辯論修養法 △久保田吾良君  
△所感 △關 琴義君  
△らしくあれ、ふるな △七宮 先生  
△實習に就ての所感 △北村 先生  
終りて校長先生の閉會の辭ありて午後五時  
頃散會す

◎江畑校長御榮轉 多年本校の爲に盡瘁し  
熱誠を以て吾人を教導せられたる校長江畑  
先生には今回岐阜縣技師に榮轉せられたる因  
て十四日講堂に於て告別式を舉行せり先づ  
七宮敬頭挨拶を陳べ校長の功勞を感謝し惜  
別の情を述べられ校長之に對して挨拶あり  
更に自己の追懷談を語りて一時の逆境に苦  
むとも永遠の希望を抱きて徒らに挫屈すべ  
からざる旨を反覆され最後に岐阜縣は隣縣  
にして殊に本郡とは相接するのみならず

校門の前を流るゝ本會の流は同じく岐阜の岸を洗へば今別るとも尙共に在るが如し他日又共に林業界に於て手を携ふる期もあらんとて離別忍びざるの情面に溢れぬ坂田總代は乃ち立ちて左の送別の辭を朗讀せり

送別之辭

校長江畑先生此度岐阜縣技師に榮轉せられ近日將に任に赴かれんとするを以て本日茲に先生より告別の辭を賜はり重ねて懇懇訓戒の詞を添うす先生の教を蒙るる年に長短ありと雖均しく先生の薫化を受け深く先生の高風を仰ぐ然るに今や忽ち先生と別離せざるを得ず嬰兒慈母に別れ暗夜燈火を失ふ生等の悲み生等の損失を幾何ぞや抑々先生が本校に赴任せられしは去る明治四十年九月の交にして爾來今日に至る迄歳を閲すること六其間卒業生を出すと百五十五名の多きに上り校基歳と共に固く校風益々揚るに至りしは主として先生教化の賜と謂ふべし此時に際し先生が多年拮据せる新築校舎亦將に成らんとし前途の光明愈々加はれるを見る然り而して先生が遂に行かざるを得ざるものは一は任地の先生の郷里に近く因て以て先生が屢々老親に侍せんとする孝心に出でたる所なりと聞く是に至りて生等は益々先生の爲人を欽じ先生の行を送ら得たるを悦び涙を押へて先生の行を送らざるべからず嗚呼先生去ると雖先生の教化事業は永に此に留らん生等只先生の教に從ひ益々心身を鍛錬して他日師恩の萬一に酬ゆる所あらんとす冀くは先生家國の爲め益々自愛自重せられよ

明治四十五年五月十四日 生徒總代 阪田勸太郎

告別式を終へて直ちに紀念の爲一同撮影し

續いて講堂に於て送別會を開き職員生徒の借別の辭安井書記の送別の歌の朗吟等あり校友會よりは多年の功勞に酬ゆる爲金時計壹個及附屬品を目錄として贈呈し校長の謝辭及訓話あり名殘は盡きず各々淋しき心を抱きつゝ午後四時閉會せり

寄宿舍通信 (四月)

卒業生諸兄は遠く別れを告げられ在校生は休暇に歸省してしばし空屋然たりし寄宿舍は四月四日を以て再開致され申候旬日の間英氣を養ひたる舍生等は頗る元氣よく休暇中の事ども盛んに語合申候中にも上松共有林測量より歸りたる數名は其印度人然たる面に得意の色を浮べて大氣焔を吐き申候人夫より先生檣那など呼ばれて光榮此事に御座候てふ大氣焔にて一同を煙に巻き申候法螺吹大家と彌次の妙手との鉢合せは仲々盛んなものに御座候

寄宿舍通信 (五月)

諸兄益々御清祥奉賀候、舍生一同不相變元氣旺盛に御座候

名組長二年一年各六名に御座候二ヶ月交替にて候起床自習等の時間は總て本舍の鈴によりて行はれ食事も入浴も本舍に來りて辨ずる様なり居候これにて本舍人員は前年度と相伯仲することに相成申候

觀櫻會より一筆啓上仕候

今や春酣にして所謂櫻花亂發豐艶愛す可きの候に御座候へば本日小丸山に於て盛大なる觀櫻會を實習の骨休め勞働仕り候月に叢雲花に嵐の響に洩れ候はで昨日あたら花を雨に叩かせ候へ共かゝる處に反つて風流は有之候ひき、さて開會前學校より小丸山迄の道にかくし申し候寶深し有之候吾こ探し出さんものと火事に焼け残されたる金庫又は橋の下と道々鶉の目鷹の目をキヨロつかせ道行く人に不審の眉を見張らすも可笑しく候ひき

校友會四月例會辯士短評

あり密柑あり菓子實習歸の空腹を減じつゝある折柄其の甘さは太宰の珍珠にまさる程にて候ひき

開會の辭

開口一番櫻花爛漫として櫻の花... 雨に向つて恰も頃日植付けせし演習林の苗木の喜びを述べるやら滑稽の口振多々なり然も平生眞面目の人だけに以上により面白

生 活

良鷹は爪を藏すとか全く君も其通り在學將に二年であるが今のいま迄君の達辯を知らなんだ希くば今後とも益々振はれたい

村 上 義 光

手振口振顔振宛然〇師然として大に感興を引いた

共 同

チク／＼と牛の歩みのよう運くとも式である態度は沈着だが惜むらくは僕の耳よく聞きとれざりしを音聲の低き嫌なきか

農 村 脱 走

最初演題が前會に屢々論せられしも自己の説く所は全く異なるを告げさて徐ろに口を開く矢張り口重なり但し着眼大によし

坐る國民

時々出るネーが何か教授でもしてやうな感がある然し演題もよく／＼面白

戸 隱 登 山

失敬だが君はいつも両の手首が動く時々上を向くのが強いて言つたら欠点だらうか

談 論 盛 況

元氣よし意氣大に昂る

生 臭 坊 主

若いだけに演題も若いしかし元氣愛すべし

一 休 和 尙 參 禪 法

沈着達辯自づと聴者の耳を澄ます辨者自身もスマシたかの如し

耐 忍

登壇するや大喝一聲鐵腕を振ひて元氣を鼓

舞せしむ元氣ありたゞ惜むらくは音聲漸次  
 低降の傾向なかりしか?  
 奢 修 七 宮 先生  
 ぶるならしきの戒めは面白い味ひもある  
 實習中の感 北村先生  
 寓意的訓戒なり吾人の印象深し  
 最後に會長より校友會の性質に就きて▲雜  
 誌部委員(羽田、成瀬、喜多村、家高、齊藤、新  
 田)六氏の發表ありて喝采場裡に散會を告  
 ぐ轉じて窓外を望めば雨上りの空新緑濃か  
 に清爽の氣四周より豊ふ蕪言多謝  
 附記す例年に比し今回の甚だ盛大なりしを  
 喜ぶ併せて爾後の發展を期す(會場にて)

通信

○豊橋工兵第十五大隊

林 恒

拜啓生儀其後は全く御無沙汰に打過ぎ奉多  
 謝候偉大なる校友會の厚恩を忘却したるに  
 は無御座只々軍務大多忙の爲と御海容被下  
 度候四月の校友誌上にて懐しき福嶋の大火  
 を讀み其混雜の様も察られ火事跡も目に浮  
 び申候慕しき校友の働き振り忍ばれて過ぎ  
 し昔を想起し候只我母校に事なかりしはせ  
 めての喜びと存候只今は大多忙中の多忙故  
 軍隊生活の當初の感想等詳細は六月に入り  
 て御報可申上候早々(五月十四日着)

在盛岡高農校

宮 澤 清 輔

謹啓其後の御無沙汰平に御海容な被下度  
 候時分柄春暖相増すの候校友諸君には如何  
 候(下畧)

御起居なされ候哉御伺ひ申上げ候降而小生  
 前便の通り去月八日退京後實家にて静養致  
 し十三日出發十四日の夜より當寄宿舎の人  
 と相成り候も着盛早々頓と有様も譯らず遂  
 御無音致し候漸く當地も花の時朝と相成り  
 梅の散りしは昨日の事と思ひしに早や桃櫻  
 一時に咲き出申し候簡易生活が生存競争の  
 勝者たるの要件とすれば斯く一舉春を送る  
 も之れを暗示するものかと思ひ及べば荒れ  
 たる東北の天地尙吾等に奮闘を勧むるもの  
 に乏しくは無之候南部富士と稱する岩手山  
 は學校の後方高く聳へ朝夕之れを眺めては  
 崇高の氣に打たれ申し候  
 學科は一年は主に普通學多く稍専門的のも  
 のは測量のみにて候學科の中特に努力を要  
 するものは獨逸語數學化學地質等にて候獨  
 逸語は一週六時間にて數學は球面三角化學  
 は有機化學の定量分析地質は豫備として礦  
 物の結晶學を學び居り候  
 同窓生加藤正次君も同じ寄宿舎に起臥する  
 の身誠に心強き次第にて御互に勵み居り候  
 實習の如きも一年は測量を除けば外に實習  
 と云ふ程の事も無之候何れ有様能く譯れば  
 後便を期して申し上ぐ可く候  
 先づは御無沙汰の御詫迄早々

全 上 加 藤 正 次  
 謹啓其後は意外の御無音にのみ打ち過ぎ何  
 とも申し譯無之候其後皆々様には相變らず  
 御壯健にて御暮し遊され候哉下て小生事去  
 る四月十五日入舎十六日宣誓有之只今にて  
 は相變らず先輩宮澤清輔君と共に勉學致し  
 居り候へば他事ながら御休心下され度候  
 當地は目下櫻花の眞盛り有之馬匹共進會  
 も去る五月一日より開かれ盛大を極め居り  
 候(下畧)

正 誤 四月號種子嶋通信

四月號の予の通信惡文に加へ誤謬の多いに  
 一驚三嘆轉自己の無能と粗漏を悲しむる  
 を得ず兎も角其甚たしきもの丈正誤して置  
 く、八頁一段一二行三百の人口は三萬の人  
 口に一百餘町は一万餘町に一五行數百町は  
 數萬町に、二七行事は予に、二段一六行梓  
 は樟に、二五行退屈云々は必要二八行少  
 し晚いけれども二七行植林はの下に、三  
 五行憑案は懸案に、三段一二行床植は床柱  
 に、一八惡息は惡臭に、二三行河岸は海岸に  
 、三六行茄科は五茄科に、九頁一段五行要  
 講は要請に、二八行槐科に、三五行床櫓は  
 床播に、二段八頁類は不用千二行海と入は  
 海は人に一六行文字は文字に、夫れ訂  
 正して讀み給らん事を

會費領収報告

- 金壹圓
  - 三十六錢
  - 五十錢
  - 七十三錢
- 松 澤 秋太郎君  
 服 部 正 義君  
 加 藤 正 治君  
 原 喜 四 三君



明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可